

第112回 三方限古典塾（'16, 2, 18）

洪 自誠（1561～1616）「菜根譚」（その3-29）

1 山林は是れ勝地なるも、一たび管恋せば、便ち市朝と成る。書画は是れ雅事なるも、一たび貪痴せば、便ち商賈と成る。蓋し、心に染着無くば、欲界も是れ仙都なり。心に係恋有らば、楽境も苦海と成る。 後集 36

（意識） 人里離れた山林は、隠れ住むにはすぐれた地であるが、そこに住むことに一度こだわると、そこは賑やか町中と同じになってしまう。書や絵は元々高尚な趣味であるが、一度それに取り憑かれると、それは利を得る商人と同じになってしまう。

思うに、心に執着するものがなければ、俗世間も仙人が住むという理想郷と同じであるが、心に執着があれば、安楽の世界もたちまち苦しみの世界となるであろう。

（余説） 何事でも一度でも執着すれば風流も俗物となり、楽も苦に変わってしまいます。

「〇〇でなければならぬ」と思うことは己の信念でもありますから、そのこだわりを捨て去るのは、現実にはなかなか簡単ではありません。しかし、俗物と言われようと苦海に落ちることになろうとも、私心と我欲からのものでないのであれば、曲げることのできない頑固さも今の世には必要な場合がある気がしますが、いかがでしょうか。

（参考）菜根譚・後集 31 「寂を嗜む者は、白雲幽石を觀て玄に通ずとし、榮に趨る者は、清歌を見て倦むを忘る。唯、自得の士のみ、喧寂無く、榮枯無く、往くとして自適の天に非ざるは無し。」（静寂や華やかさなど何れにも固執せず、悠々自適な生活を）

2 時、喧雑に当たれば、則ち平日記憶する所のものも、皆漫然として忘れ去る。境、清寧に在らば、則ち夙昔遺忘する所のものも、又恍爾として前に現わる。見るべし、静躁稍分れば、皆昏明頓に異なることを。 後集 37

（意識） ごたごたして騒がしい時には、ふだん記憶していることまで、すべてうっかりと忘れてしまうことがある。これに対して、落ち着いた静かな環境にいと、とうの昔に忘れていたことまで、ありありと目前にあらわれて思い出される。

これでわかるように、静かな環境にあるか、騒がしい環境にあるか、そんな些細な違いが意識（心）に影響して、記憶を失わせたり、よみがえさせたりするのである。

（余説） 環境が人の心に及ぼす影響の重大さを述べています。それはそのとおりですが、その人の心の有り様も又一つの大切な環境です。洪自誠と同時代の呂新吾（1536-1618）は、心の沈静を重要視し、その著「呻吟語」には「沈静なるは最もこれ美質なり。蓋し心存して放たれざる者なり。今の人は独り居て事なければ、すでに自ら岑寂にして堪え難く、纔に事に応じ人に接すれば、便ち口に任せ情を恣にす。即しこれ清狂なるも、また徳を蓄うるの器に非ざるなり。（存心）」とあります。

口に任せ話す喜びに終始して心を失う愚を犯すのでなく、一人静かに家にある時には、常の心の平静さを保つために、心を練り上げる時を過ごすように努めたいものです。

（参考）呂新吾・呻吟語「沈静とは緘黙の謂に非ざるなり。意、淵涵にして態、間正なる、此を真の沈静と謂ふ。（存心）」

（ただ黙っているのではなく、心が落ち着いていて態度が静かで正しいのが真の沈静だ。）

3 春日の気象は繁華にして、人の心神をして駘蕩ならしむも、秋日の、雲白く風清く、蘭芳しく桂馥り、水天一色に、上下空明にして、人の神骨をして俱に清らかならしむるに若かざるなり。 後集 45

(意識) 春の日の気象は、万物を茂らせ華やかにして、人の心を、のどかでゆったりとさせる。しかし、秋の日は、雲は白く風は清く、蘭は芳しく、木屋は香り、水も空も同じ色となり、夜は月光が水に映って、人の心も体も清々しくさせるのには及ばない。

(余説) 春と秋と、どちらがいいか。洪先生は秋の方に軍配を上げていますが、これは好みの問題ですら、春の方が好きだという意見もあって、それでよいのでしょうか。

本文の、蘭・桂・水天・空明などの語句は、北宋の文学者・書家・政治家であった蘇軾が、三国志の古戦場・長江の赤壁付近の舟上で歌った詩「前赤壁賦」から取っています。

(参考) 蘇軾(1036-1101)・前赤壁賦「……白露江に横たはり 水光天に接す……歌に曰く桂の棹蘭の槳 空明を撃って流光を浜る 渺渺たり予が懐ひ 美人を天の一方に望む……」 (大変長い詩のごく一部です)

(長江の流れが白露のように光り、その光が天に接している。歌にいわく、桂の棹と蘭の槳で(小舟を漕いで)、月に照らされた水面をかきわけ、流れに映る月の光を遡る。わが思いは遥か遠く、天の彼方にある明月を望む)

4 機の動けるものは、弓影も疑いて蛇蝮と為し、寝石も視て伏虎と為す。此の中渾て是れ殺気なり。念の息めるものは、石虎も海鷗と作すべく、蛙声も鼓吹に当つべし。触るる処俱に真機を見る。 後集 47

(意識) 心が動揺している者は、弓の影を見ても蛇や蠍と疑い、草むらに横たわる石を見て虎と思う。そこでは、見るもの全てが自分に襲いかかるような気がする。心が平静な者は、石虎のような乱暴者も鷗のように温和くさせ、騒がしい蛙の声も鼓や笛の音のように聞こえる。そのような人には、触れるもの全てを真実の姿で見ることができる。

(余説) ここには四つの故事が含まれます。楽公の客人が、壁に掛かった弓の影が盃の酒に映っているのを蛇蝮と錯覚してこれを飲んで病気になった話(晋書)。飛將軍と称された漢の李広が、野中の石を虎と見まちがえて弓を射たら鏃が見えなくなるほど深く突き刺さった話(史記)。後 趙の暴虐な王石虎が、天竺僧の感化によって鷗のように温和くなった話(晋書)。南齊の世事に無頓着で家の草も荒れ放題の孔珪には、蛙の鳴き声も風流な鼓や笛の音に聞こえた話(南史)です。「杯中蛇影」や「一念岩をも徹す」のものとなった故事で、「疑心暗鬼を生ず」や「幽霊の正体見たり枯尾花」と同様です。

穏やかな人生を送るためには、まずは諸事に故なき思い込みを避けて、雑念や邪念を去り心を平静に保てるように努めたいものです。

(参考) 列子・説符篇「人に鉄を失う者有り。其の隣の子を意う。其の行歩を視るに鉄を窃むものなり。顔色も鉄を窃むものなり。言語も鉄を窃むものなり。動作態度、為すとして窃むものにあらざるなし。俄にして其の谷を掘りて其の鉄を得。他日、復た其の隣人の子を見るに動作態度、鉄を窃むに似たる者無し。」 鉄：斧(おの・よき)